

岡本天明著（黒鉄の巻）より抜粋

第5帖

「プラスとマイナスと和合せねばならぬ。ただの和合ではムになって力でんぞ。今まで和合のやり方ではならん。よろこびの和合。溶け合う和合。キある和合でないと、少しでも曇りたら和合でないぞ。堪えに堪えていゝのでは和合ではないぞ。今までの和合の仕方ではカスあるであろうがな。悪の和合であるぞ。神示肚に入れないで御用難しいぞ。初めは目標を作って進まんと、行ったり来たり同じ道をドウドウ巡りじゃ。つかめるところから掴んで行けよ。拝んで行けよ。統一した幸福こそ、フジ（不二）晴れの幸福ぞ。」

読み解き

「言霊ワといえ、その内容を端的に表す言葉は我・和・輪であろう。我とは吾に対する汝であり、始めに対する結果の意味でもある。和とは戦争や混乱が静まった状態のことであり、また多くの数の合計とか、調和を意味する。輪は丸い形をしたものであり、詳しく言えばそれは輪の一点で正反対の方向に離れていった両者が、無限大の時間と距離の経過の果てに、ある一点で再び相会する事を表している。人間の頭の中に、また歴史のある時代に、一つの状態が存在している。その状態が最も盛んになった時、その考えや時代の風潮の中に今までの状態とは全然反対の状態が新しく興って来る。同じ考え、同じ歴史の中に正反対のものが争う。やがてそれら正反対の両者は、時の経過と共に両方のそれぞれの特徴を失うことなしに、次の全く違った状態で統合される。初めの状態が正、それと反対の状態が反、それら正反の二つを総合する立場を合、と考えると、いわゆる、正反合の弁証的な考えが成立する。」

と和の事で言霊では説明があります。和合とは簡単ではなさそうです。

和（ワ）と言え、お互い我慢しながら和を保つのではなく、とことん反対意見を通したあげくに1つになることを云っているようです。で（ワ）するために、無限大の時

間と距離の経過の果てに、です。それは自分の手には今から動こうとする動作の反対の
氣を感じます。そのまま動かすとぶつかります。しかし一度感じている自分の手を無限
に細くして、目には見えない消えてしまう、けれどそこには存在する、心の軸を意識し
て廻します。するとワ（和）が成立します。

ウをムまで追いかけます。

和合するにはやはり ア段（愛と慈悲）に立つ他はなさそうです。

..その 136 に続く

ひふみ神示 黒鉄の巻き その 136

岡本天明著（ひふみ神示）より抜粋

第 9 帖

神心には始めも終わりもないのじゃ。総てがあるのであるぞ。三千世界よ。総てが秘文じゃ。他力の中に

自力あるのぞ。自分ばかりでは成就せんぞ。足踏みばかり。愛は愛のみでは愛ではないぞ。真は真のみで

は真ではないぞと申してあろうが。祭り合わせてキ入れて愛となり

真となるのぞ。愛のみ出ると悪となり真のみ出る偽となることあるぞ。偽りと悪とまつりて善の働きすること

あるぞ。心せよ。

読み解き

ひふみ=123=言霊ウが言霊ア（吾）と言霊ワ（我）に分かれて総てが始まることか、
そこから宇宙が始まるため自力では何も出来ない、他力の中に自力あるぞ、つまり相手に
問いかけて、答えを返すのは相手である。そこから現象化が始まり宇宙が出来たこと
を云っているのか？

祀り=マツリ 神・人 善・悪 美・醜 真・偽 愛・憎 つまりそれぞれ相反する二
つで一つのこと

第 11 帖

学出すからが、我出すから行き詰まるのぞ。生まれ赤子と申すのは学も我も出さん水晶のことぞ。練り直

して澄んだ水晶結構。親の心分かったら手伝いせねばならん。言われん先にするものじゃと申してあろうが。

いつまでも小便かけていてはならんぞ。人間は罪の子ではないぞ。喜びのこぞ。神の子ぞ。神の子なればこ

そ悔い改めねばならんぞ。真なき愛の道、悲しみの喜びから生まれることあるぞ。それは罪のこと申すのであ

るぞ。

読み解き

学出すとは言霊オ（経験知）の世界のこと、生まれ赤子の心とは言霊アの世界の心の事しかしそれだけでは駄目で大人の心を持った赤子であること、ア段に立っての判断が重要と云っていることか

第 15 帖

人間を幸福にするのは心の向け方一つであるぞ。人間はいつも善と悪との中にいるのであるから善のみと

いうこともなく悪のみということもない。内に神に居りて外が人に和し、内が霊に居りて体が外が和せば、

それでよいのじゃ。そこに喜び生まれるのじゃ。神から出た教なら、他の教とも協力して共に進まねばならん。

教派はや教義にとらわれるは邪の教。豚に真珠となるなよ。天国の意志は人間の喜びの中に入り、幽界

の意志は悲しみの中に入る。

読み解き

心を光りに向けるか影に向けるかで幸福になるかどうかが決まる。良心を心に人と和すとは

ア段に立ち（慈悲と愛の心で）接すると云うことか

・ ・ その 137 に続く

ひふみ神示 黒鉄の巻き その 137

岡本天明著（ひふみ神示）より抜粋

第 19 帖

愛から離れた理解はないぞ。善から離れた真理はないぞ。タネなくて芽は出ん道理。人間の智でわからんことは迷信じゃと申しているが、神界のことは神界で呼吸せねばわからんのじゃ。わからん人間だからなんと申しても神を求めるといよいよになりたら道はないことぞ。学にとらわれてまだ目がさめん気の毒がウヨウヨ。気の毒じゃなあ。人間は霊人の方のカタシロになるからこそ養われているのじゃ。成長していくのじゃ。智は愛によって生き愛はヨロコビによって生きるのじゃ。喜びなきところに愛はないぞ。きなきところに生命栄えんぞ。

読み解き

光りからつまり、キ・真・善・美・愛 から離れた真理はない、離れると云うことは、そこには、よくなるタネはないと言うことと読み取れます。言霊オ（経験知）に頼ることは気の毒な結果になる。智は善悪を判断できる知恵 神界は心の世界、心で神を求めるといよいよ。人間は霊人（神）の形代になるからこそ養われている。成長すると云っている。つまり身体を優先する五官を優先するものを追求しても成長はない。喜びを求めると、幽界の喜びではない、神界の喜びをもとめること、つまり人を育てること。

第 21 帖

身も心も嬉し嬉しになるのがまことの神じゃ。ものの嬉しさだけではゼロじゃ。たまの嬉しさだけでもゼロじゃ。

よく心得なされよ。死後のみを説く宗教はゼロの宗教じゃ。迷うでないぞ。この世で天国に住めんもの、天

国に行ける道理ないのだと申してあろう。神は人間の命、人間は神の容れ物であるぞと申してあろう。人間

の極まる場所は神であるぞ。霊人は中間の存在ぞ。人間は神への土台ぞ。この道理わかるであろうが。

○は三五七ぞ。三の○から三五の○神。三五七の○。

読み解き

身魂が嬉し嬉しになるのがまことの神である。この世に住むということは、人間の世つまり神の裏 天国は神の世つまり人間の表（本当の顔）ということか

第 24 帖

悪とはカゲのことであるぞ。斜めに光を頂くから影できるのじゃ。影は主人ではないぞ。絶対は何と申しても絶対ぞ。相対から神を求めると、相対の神が現れるぞ。相対で神の道に導くことなかなかじゃ。必ず後戻り。判りはせんぞ。この神示肚に入ったらグレンと変わりてくるぞ。早う肚に入れて下されよ。間に合わん。天の声は内から聞こえてくる。人間の言葉は外から聞こえてくる。霊耳と申すのは内からぞ。耳塞いでも聞こえてくるのじゃ。悪霊自身は自身を悪と申してないぞ。

読み解き

影は光りがあるから影ができる。本当のものは光りの中にある。別な言い方をすると、喜びが神であるから、肉体の喜びは影の喜び、心の喜びは光りの喜び、心の喜びを求めよ。影の喜びは相対の喜びと言っている。影の喜びで神を求めても判りはせんぞとのか

・・・138 に続く

ひふみ神示 黒鉄の巻き その 138
岡本天明著（ひふみ神示）より抜粋

第 25 帖

心は草にも木にも石にもあるぞ。天に瞬く星にもあるぞ。ただ薄いか厚いかの相違であるぞ。キの中のキには悪は入れないのであるぞ。外のキの中に、外の智の中に悪が入るのじゃ。人間の智の中には悪も善も入るぞ。入るからこそこれは善じゃ。これは悪じゃと判るのじゃ。人間の自由はそこにあるのじゃ。自由なければ発展ないぞ。弥栄ないぞ。霊を信じる者は霊と語り、肉を信じる者は肉と語り得るのじゃ。人間そのものから湧き出づる喜びはないぞ。よく心得なされよ。

読み解き

総てのものに心があると言っている。ものの背後に必ず靈的存在のあることを云っているのか、となると、やはり天地と一体になることとは、自分の「靈駟り」を総てのものを透して行くことが必要に思われる。

キの中のキには悪は、入れないということは自分の靈の靈の中には悪は入れないということ。自分の「良心」には悪は入れない。人間の智の中には悪も善も入るとは、判断する心つまり実践智の中には悪も善も入ると云うことか。そこに悪が入るからこそ、これは善、これは悪と認識できる。人間の自由とはそこにあると言っている。だから発展があると、その認識できる智の中には喜びないぞということ、その奥の靈の靈の中から湧く喜びを感じるから、喜びがあると。神の歎びが、キ、真善美愛となって現われるということ。

靈の靈はその人の心の靈、肉の靈は体の靈、靈の靈を信じるものは靈と語り（つまり神と語り）肉の靈を信じるものは（つまり先祖の靈）と語る事が出来ると云っている。

第 26 帖

神は理屈ではない。理^{みち}であるぞ生きた自由自在の、見当とれん、絶対であるぞ。ただ求めるより他に道ないぞ。親呼ぶ赤子の声で神を求めよ。神に呼びかけよ。総てを投げ出せよ。任せ切れよ。神は喜びの光と
なって、そなたに現れてくるぞ。理屈の信仰にとらわれると邪道。赤子の心の理解は第一ぞ。

読み解き

神は理屈ではないぞ、とは言靈オの次元にあると云うことではない。理とは宇宙の経綸に添う道、唯求めるより他ないぞ、自分の良心の欲する処を求めるより他はないこと。親を呼ぶ声で神を求めよ。神に呼びかけよ。総てを投げ出せよ。任せ切れよ。とは良心を信じて、祈りそして進めと言うことか。

…その 139 に続く

ひふみ神示 黒鉄の巻き その 139
岡本天明著（ひふみ神示）より抜粋

第 27 帖

神は人間の想念の中に入っているのじゃ。想念が一致するから神の想念が人間に伝わるのぞ。人間の言

葉となって人間に現れる。言は神であるが人間でもあるぞ。自分が自分に語るのであるぞ。この道理よく

心得なされよ。時まちて起きて下されよ。怨みの霊は中々解けんぞ。思いは働き、実在と申してあるが、間

違いでも恨まれると、恨みが纏いつくぞ。心して神を求め。心し幽界からの、キ断ちて下されよ。判ったと思

うたら天狗ぞ。省みるとよくなる仕組み

読み解き

神は人間の心にあるから、神の思いが伝わる。人間の言葉と成って人間に現われる。つまりある人があるタイミングで神業的なことを言っている、と思うのはそこに神が入っているからと。言=事この世に現われ出たものは神であるが人間でもあるぞということか、自分の言葉で現れ出た現象は自分の引き起こしたもので、ある道理をよく心得よ。現れ出た現象で反省してくださいと。恨みの霊は中々解けない、つまり人から恨まれた霊（生き霊）は解けないぞ、相手が間違っている、思いは働き、実在と成って迫ってくるぞ。心して神を求めよ、恨まれていることを逆恨みするな、そのキを断ち切るとは、感謝の思いで調和させる事、溶かすことか。何度でも感じるたびに

第 29 帖

運命は自由自在のものであるが、また強いるものでもあるぞ。大きくも、小さくも、薄くも、厚くも、その人の

心次第に変わるぞ。もとは霊界にあるからぞ。嬉し嬉しで運命を迎える気、結構ぞ。この世のことだけでこ

の世のことは動かんぞ。霊界との関係によって、この世が動いている道理判らねばならん。早う神の心に、

神意さとれよ。遠慮要らん。何事も天から出てくるのじゃ。天からとは心からのことじゃ。

読み解き

運命は心次第で自由になるが、強いるものとは、好き嫌いに応じず、その心通りの結果が現れて来るものである。元は霊界つまり自分の運命の鍵は心にあると云っている。嬉し嬉しで運命迎える気とは自分の心で描いたものを喜んで受け取る気結構ですと言っている。何事も自分の心からの思い次第であることを云っている。

…140 に続く

ひふみ神示 黒鉄の巻

その 140 岡本天明著（ひふみ神示）より抜粋

第 32 帖

祈りとは意が乗ることぞ。靈の靈と靈と体と合流して一つの生命となるぞ。実力であるぞ。想念は魂。魂は靈であり、靈の世界に属し、靈に生きるのであるぞ。ものは靈につけられたもの、靈の靈は靈につけられたものであるぞ。ものには物の生命しかない。真の生命は靈であるぞ。生命のもとの喜びは靈の靈であるぞ。靈の靈が主だと申してあろう。奥の奥の奥のキは大神に通ずる喜びであるぞ。キあるために人間となり、人間なるがゆえに神となり、神になるが故に喜びであるぞ。他の生き物にはキあれど外のキであるぞ。

読み解き

祈りとは自分の意志父韻が言葉になって創造活動が起ると云うこと、しかし祈りだけでは駄目で靈の靈（神靈）と靈の体（肉体靈）と合流して生命となると言っている。ものは靈につけられたもの、つまりものとして現われた人間の肉体は、ものの生命しないと云っている。真の生命は靈の靈（心の靈）、大神に通ずる喜びである。他の生き物は外からのキを受けて生きている。人間は内に元のキがあると云っている。

第 33 帖

神が映らぬと申しているが、心を柔らかくして任せ切れれば刻まれるぞ。平かにすれば正しく写り凸凹すれば曲がってうつる。神の前に固くなってはならぬ。人間は肉体を持っている間もその靈は、靈の国に住んでおり、靈の靈は、靈の靈の世界に住んでいるのであるぞ。この通りよくわきまえよ。愛は脈打っているぞ。真は呼吸しているぞ。肉体にあっては肺臓は呼吸し、心臓は脈打つ、この二つが一つであって、肉体を生命する。喜びと三つが一つであるぞ。靈にあっては靈の心臓、靈の肺臓、喜びあるぞ。

読み解き

合氣道で心を鎮めると、その心に相手の心の動きが映ると教えられました。心の波を無限に小さくして行くと神が映る。言霊ウ（欲望・経済・産業）と言霊オ（経験知・知識・学問・科学）の世界は自分の利益のために動いているために、心が絶えず自分の事に向いている。氣の流れを感じない。言霊ア（感情・芸術・宗教）段に立つと、この感動をどのように皆に伝えるかと利他のために心を遣うために自分の氣は外に流れる、そのために相手の氣の流れを感じることが出来る。

愛は脈打っている。つまり渦として常に動き続けている。真は呼吸しているとは氣の流れが出たり入ったりしている。氣の呼吸が出来ている。この愛と真が生命であると云っている。

..その 141 続く

ひふみ神示 黒鉄の巻き

その 141 岡本天明著（ひふみ神示）より抜粋

第 34 帖

祈りは弥栄であり、限りない生活であるぞ。生命のイキであるぞ。祈りから総てのもの生まれるぞ。真の喜

びの祈りからはキが生命し、カゲの祈りからは身が生命するぞ。人に祈れば神祈り、人為せば神なる道神

じゃ。禁欲は神の御旨でないぞ。慾を浄化して、生めよ。産めよ。今の人民、慾の聖化を忘れてござるぞ。

慾は無限に広がり、次々に新しいものを生み出すぞ。慾を導けよ。自分だけなら五尺の身体、五十年の

命であるが、霊を知り、宇宙の意思を知り、神にとけ入ったならば無限大の身体、無限の命となるぞ。マ

コトの嬉し嬉しの喜びとなるのであるぞ。

読み解き

祈りは弥栄であるというのは、総ては祈りから始まる。自分の心が決まる状態（希望）も含めて、神示の別な箇所「希望は神ぞ」という部分がありますがそのことと思う。生命のイキつまり言霊イのキと言うこと、ムからの流れ、空の宇宙からのキの流れの起り、真の喜びの祈り（真の喜びとは神示の別な箇所です。）からキが生命し（キの呼吸と脈動が起り）、カゲの祈りから身が生命する。（我よしの祈りから、肉の呼吸と脈動が起る。）禁欲は神の心ではない、慾を浄化せよ、我欲を大欲に

せよと云うことか、慾が次々新しいものを生み出す原動力に成る。欲を大欲（人類総ての望みとなるものへ）と導けということか、自分の我欲は五尺身の丈止まり、霊を知り、宇宙の意思を知り、神に溶け込んだなら無限大の身体、無限の命（釈迦やキリスト）の事を指しているのか、誠の喜びになるとのこと

第 35 帖

キが到ればモノが到る。モノを求める前にキを求めよ。めあてなしにあるいたとて、くたびれもうけばかり。人生の目当て、行く先の見当つけずに、その日暮らしの、我よしの世に成り下がっているぞ。目当ては⊙のキではないか。キに向かないでウロウロ。草木より成り下がっているではないか。為すとは祈ること。人のために祈るは、己のために祈ること。今の人民、祈り足らん。

読み解き

モノを求める前にキを求めよとは、金儲けがしたいは、金というモノを求める心、他人を幸せにしたいは、幸せというキを求めると云うこと、目当てなしとは、自分の祈り、希望、なしにということ、目当ては神のキつまり自分の良心に従う祈りと動き、人のために祈るとは、己のために祈ることとは言霊アの世界まで自覚したらそこは感情の世界、総ての人は繋がっていると云うことを、感得する世界である。

第 38 帖

人間の死後自分の命の最もふさわしい状態に置かれるのであるぞ。悪好きなら悪の、善好きなら善の状態に置かれるのであるぞ。皆皆、極楽行きじゃ。極楽にもピンからキリまであるぞ。神の御旨に沿う極楽を天国と言ひ、添わぬ極楽を幽界と申すのじゃ。心の世界を整理せよ。そこには無限のものが、無限にあるのであるぞ。神の理が判れば、判っただけ自分がわかる。めでたさの九月八日の九の仕組み、溶けて流れて世界一つじゃ。白銀、鉄、これで終わり。

読み解き

人間の死後は自分の望んでいる世界に置かれる。その人の常に描いている思いの世界に

導かれる。神の御旨に添うのを天国、添わぬ、のを地獄と云うが、本人にとってはそこが希望する場所で、喜んでいくのであると云っている。本人にとっては極楽ということ。

…その 142 に続く